

令和6年度第1回青森県こども未来県民会議 議事録

日 時 令和6年 6月 22日(土)

場 所 AOMORI STARTUP CENTER

(宮下知事)

今年度、第1回ということですので、改めてなんですが、やっぱり合計特殊出生率が改善するだけじゃだめで、合計特殊出生率が2を超えないと、いずれ青森県は本当になくなるので、日本も同じなんですが、本気です。

こども未来県民会議では、実は子育てとかこどもとか、子育て世代が対象になっている政策だと思われがちなんですけど、直接はそうなんですけど、実はそれだけじゃなくて、やっぱりこどもたちを大切にしていってということは、全世代のためになる、全世帯のためになる。全世帯ってというのは、別に単身世帯であろうが、こどもがいない世帯で高齢世帯だとか、結局、今のこどもたちに社会制度上、この後支えられるんですね、年金にしても、それから介護としても。あるいは、社会経済を支えていくのは若い人たちだったり、生産年齢人口の人たちだったりするわけですから。

やっぱりどう考えても、今のこどもたちにまずその全世帯が支えられるし、全世代が支えられるから、こどもたちのことをちゃんとやるっていうことは、本当に未来への投資だというふうに思っています。その辺を、まずは皆さんと共有しておきたい。

この会議というのは、青森県の未来のための会議です。いよいよ10月には一定のまとめをしなければいけないということで、これまで皆さんからこうやって多くの意見をいただいています。そのことについては、何を入れて何を入れないという議論はしません。基本的に全部入れる。ただその入れ方、文章の色んな書き方、表現の仕方とかってというのは、少し我々の方で工夫をさせていただくんですが、よりわかりやすく、よくある行政の文章ではなくて、もう少しソフトなことで伝えられるようにちょっと工夫はしたいと思います。

だからこの取組があくまでも青森県の未来への投資のための取組で、もちろんこどもたちと子育て世代がターゲットにはなっているんですが、今日は講演の講師から「こどもは地域へのパスポート」というお話もありましたので、そういう新しい視点もいただきながら進めていきたいと思っています。

今日、皆さんからお伺いしたい意見というのは、もちろん、ファザーリング・ジャパンの徳倉様の講演やと県の「こどもと子育て及び結婚に関する分析」の報告についてもですけど、前回からしばらく時間が経ちましたので、何か思うとこ

ろがあればそういうことも伝えていただきながら、あるいは取りまとめに向かってどういうふうなことを考えていけばいいとか、そういう話も含めて皆さんからいただきたいと思っています。

私の方からも、それぞれお話した後に少しコメントさせていただくかもしれませんが、御協力をいただきながら進めていけばと思います。

ということで、どなたからかスタートを切っていただければ。では種田さん。

(種田さん)

私は報告にあった「A I であう」を見て、マッチングシステムはたしかに不安とか抵抗があるなと思いました。私はもう結婚してるんで使えないですけど。例えば、昔ナインティナインの岡村さんが、お見合い大作戦みたいなことをやりましたよね。知事のお薦めする人材を集めてみたい、なんかできないのかなと思って。県でやる大規模なそういうものがあったら良いのかなと思います。マッチングシステムよりも。

(宮下知事)

これはね、私がどれだけ信頼があるかはさておき。でも、やっぱり、それは一つあると思うんです。ただやり方の問題で、意外と私もこれに市長時代も取り組んでいたんですが、その地域、本当に限定された市町村とかその周辺でやると、参加者が固定化されるんだよね。

もう一つは、逆に、来た人たちが恥ずかしがるから、あんまり来ないでくれて言われたりもしていました。

でも、種田さんが言うように、私もさっきこの説明を聞いていて思ったんですけど、もっとすごい大規模な、なんかフェスみたいなことなのかな。そういうのもいいかもしれないと少し感じています。御意見ありがとうございました。皆さん拍手お願いします。今日それだけでいいですか。

では次は、山内さん。

(山内さん)

「A I であう」関連で、私も意見があると思ったのでお話しします。私もマッチングシステムのところが気になって。私たちはその登録をしてないから、どんなことをやられているのかわからない。

結婚した人目線の、ここも聞いた方が良いんじゃない、みたいなところがあると思います。淘汰されてマッチングシステムとして成り立っているのかもしれないけれど、青森ならではの視点と、もう結婚された人ならではの視点を入れて、よりよいシステムにしていくということです。

(宮下知事)

システムの中身ということですね。

(山内さん)

中身です。

(宮下知事)

ありがとうございます。皆さん拍手お願いします。

システムの状況っていうのは、この前ニュースになったんですよ。では、見てください。

【動画】

県のマッチングシステム「A I であう」について、成婚10組目を記念したセレモニーが県庁で開かれた報道について視聴。

これに、921人が登録して、10組ができていて、これからですね。だから皆さんにも御協力いただきたいのは、まずこういうのがあるっていうことを、結婚したいという方に御紹介いただいきたいです。利用するのは、結構大変で、独身証明とかをとってからじゃないと登録できないんです。

でも、両面あって、それが大事ですよねって言ってくれる人と、それにハードルがあるっていう人がいて。ただ独身のふりをするような人もいるから、それを防ぐためには独身証明書が必要なんですけど。

山内さんどうぞ。もう一言。大丈夫ですか。

(山内さん)

違う内容でも良いですか。

(宮下知事)

もちろん大丈夫です。

(山内さん)

婚姻率は46位ですよ。でも、合計特殊出生率は最下位ではない。

(宮下知事)

最下位ではない。

(山内さん)

37番ぐらいだと思うんですけども。そう考えると、青森県は結婚してしまえば、産みたいなって思う気持ちになるのかなと思います。

(宮下知事)

それはまさにその通りで。さっきのデータがありましたよね。2.07って書いていたと思うんですけど、だいたい夫婦で希望するこどもの数が、2人から3人というふうに言ってくれているので、結構これは希望ある数字だと思っていて。だから希望をを叶えてあげるためにどんなことをすべきか、ということをやっぱり考えていかなきゃいけないということだと思っています。よろしいでしょうか。

(山内さん)

ありがとうございます。

(宮下知事)

はい、ありがとうございます。

次、小山さんお願いします。

(小山さん)

よろしくお願いします。

子どもと子育て及び結婚に関する分析を見まして、やはり私も婚姻率全国46位ってところが引っかけたんですけども。そもそもこれ若い人がいないのが大きな原因じゃないかなと私は思いまして。

最近、色々雑誌を読んでいて、この雑誌なんですけど。あるデータによると、転入が多い、社会増エリアっていうのは6都府県だけなんだそうです。これらには共通点があって、男性よりも女性を多く集めているそうなんです。じゃあどんな層が集まっていくのかっていうので、転入のデータを見ると、20歳から24歳の女性が3割以上を占めているということなんです。

つまり、就職で女性はその首都圏に出ていくっていうことだと思うんですが、じゃあどうやって若い女性に留まって青森に就職してもらおうかっていうのが、ポイントじゃないかなと私は思います。

(宮下知事)

ありがとうございます。そしたらこのテーマで5分間だけ皆さんから一言ず

ついただきます。

なぜ、青森県に女性が定着しないか。青森県の風土的にこういうところがまずいんじゃないかと思う点を、皆さんから一言ずつお願いします。職場環境とかそういうことも含めて。亀山さんから。

(亀山さん)

私会社経営しております、女性を多く95%ぐらいは女性を雇用しているんですけれども、先ほどお話に出たように、時短勤務とか短時間正社員制度とか入れたり、あとは子育てがしやすいように何かあったときにはすぐ休み差し上げたりとか、有給取得率もかなり高い方ではないかなと思っているんですけれども。皆さん言うのが、「仕事の種類が少ない」というふうにおっしゃいます。

(宮下知事)

はい、ありがとうございます。

次、牧野さんお願いします。

(牧野さん)

大学生の長女は彼氏がいるんですけれども、「結婚しなさい」と言ってるんですが、収入の面がやっぱり心配だということで、お互いにそれなりの給料がもらえるようになったら、結婚も考えて、こどもも欲しい、と。

次女が高校生です。高校生の娘とその周りの友達就職先がやっぱり少ないといえます。自分はこういうことやりたいけれども、県内にはないから県外の大学に行こうかなと検討しています。

私は、先ほどの講演でのお話、そのままですが、もっと職場環境が良くなるように、そこをとにかく改善しようと思う人がもっとたくさん増えて、全国でもトップに行かなければいけないと思いました。以上です。

(宮下知事)

ありがとうございます。

(小山さん)

私自身の地元は岩手ですけれども、岩手を出て最初に就職したのが北海道の会社で、地元を離れているのであまり偉そうなことは言えないんですけれども。やっぱり就職活動をした10年前を思い返すと、岩手の企業で「ここに入ろう」という求人が、本当片手の指に収まっちゃうくらいで、ここだけだとちょっと

怖いから東京の企業の方が多く応募しているっていう状況で。そもそも本当に、先ほど申し上げましたけれども、バリエーションがないといいますか、行きたいと思う職業が少ないということが大きいんじゃないかなと考えます。

(宮下知事)

ありがとうございます。

(和田さん)

私は、今日の話のなかで「こどもは地域へのパスポート」という言葉が、すごいなるほどなって思った反面、でもこどもたちは多分、青森を好きになるほど地域に出てないんじゃないかなっていうふうに思っています。

愛着を持つほど、誰かと一緒にいたりとか、外の色んな人と関わったり、青森の良いところを感じる機会がもう少しこどもたちにあれば、またちょっと違ってくるのかなと思いました。

(宮下知事)

学校の方にもお願いします。

(山内さん)

私は2点考えていて、1点目は自分の過去の友達が言っていたことを思い出すんですけど、「友達の友達は友達だ」っていう、ちょっと身内というか、知り合いが多くいるっていうところです。2点目ともつながるんですけど、「就職先が少ない」、「転職したいところがない」、失敗したときに「やだな」、その失敗を友達の友達に知られている、つまりばれてしまうというか、人間関係の狭さとかかっていうことも関係しているのかな。

(宮下知事)

友達の友達がいるっていうのは、人間関係の狭さってこと。

(山内さん)

友達の友達が自分の友達だっていう、つながっている、すぐばれる、良いことも悪いことすぐばれてしまう。

(宮下知事)

そうだね、なるほど。はい、ありがとうございます。

(越田さん)

私はそれこそ皆さん言っているように、選べない、なかなか選ぶような企業さんがなかなかないっていうのと、あとは大学もちょっと少なくて。例えば、どこかの美術大学に行きたいって言っても、なかなかやっぱり青森にはないとか。

そういうので、一回大学とかで出てしまうと、やっぱりそっちで就職先を探してしまうっていうのがあるのかなというふうに思います。

(宮下知事)

はい、ありがとうございます。

(工藤さん)

私は給料の高さだと思います。小さい時からもうここに行けばすごいお金持ちになれるということが、青森にはなくて。もし勉強が好きじゃなかったとしても、ここに行けばすごくなれるっていうのがあれば、小さいときからそこを目指すんじゃないかと思うんです、というのが一つです。

それから、もう一つが求人始めるタイミングが、青森は少し遅いんじゃないかなということです。

(宮下知事)

ありがとうございます。

種田さん。

(種田さん)

私は地元を出ていない人なので、地元を出る人たちの気持ちは逆にわからないんですけど、でも地元を出ないで済んだっていう。青森県内の会社はたしかになんかちょっと小さくて不安だなと思って。全国にある大きい会社の青森県内にある支店を選べば安心だなと思ったから、やっぱり給料の面とか福利厚生とか、そういうのは大きい会社に信頼を置いていて、そういうのを信じて就職したような気がします。

(宮下知事)

はい、ありがとうございます。

(坂本さん)

私は、地元が大好きなので、一生地元から離れるつもりはないぞという感じなんですけれども、それこそ県外に出ていった友達が言っていたことを今思い出

してみると、だいたい「賃金が低い」、「雪やだ」、「楽しくない」、「遊ぶところない」、「色んなことしたい」、「推しのライブや遠征で遠い」、「芸能人来ない」、とかそういう感じのことを皆言い残して去っていった。「都会は楽しい」って、「もう絶対戻れない」って言っていますが、その友達のなかで一人が言った言葉がすごく心に残っていて、「閉塞感がある。青森ってなんか閉塞感あるよね」その一言が私的には、地元が大好きって思っている人もいれば、青森に対してそういうイメージを抱いている人もいるっていうことで、たった一言なんですけどもその背景を考えてみれば、色んな理由があるんじゃないかなと思ってました。

(宮下知事)

ありがとうございます。

難しい問題ってやっぱり因数分解していったって、原因がどこにあるかっていうのを突き詰めて、その原因を一つずつ解決していくしかなくて。今、皆さんから出た言葉は、多分私もどこかでは聞いていて。ただ、皆から聞いたからまとまった感じがあります。収入の面、それから仕事を選べないし少ない。さらにいけば、そもそも地域を知らない、愛着がないとか。あるいはその雪、遊ぶところ、今言ったライブ、遠征、それから芸能人が来ないとか。

そういう話は本当に無限にある。そもそも不安を感じるということ、給与、所得が低いってというのはその通りだと思います。知り合いが多すぎて、なんていうか常に匿名性がないよね、っていう環境もあると。

でも、本当にそうなのかなっていう。例えば仕事がないって言う割に、皆さん例えば青森県の半導体って今最先端って言われてるじゃないですか、日本のなかでも世界でも。半導体関連産業の雇用数って青森県ってどれくらいあるか知っていますか。4,000人働いているんだよ、半導体のメーカーだけで。数十社あって。ただ、意外と知らないとか知らしめてないっていうことの方に私は課題があると思っていて。やっぱりこういうのが全部積み重なって閉塞感になっていると思うので、そこはコツコツとまた別な部類分けでやっていきたいというふうに思います。

今、皆さんから話を聞いて思ったのは、女性だからっていうことじゃないですよ。ある意味、若い人たち全部の共通の課題な気がする。特に女性のっていうものがありますか、今の話のなかで。

(牧野さん)

ちょっと古い考えですけど、やっぱり男性は家を継ぐとかそういった考えが、私の親の世代とかはすごくあるんですけれども、そういうので男性は残りやすいのかな。女性の方がやっぱり結婚も外の人としても良いし、みたいな、ちょっ

と自由な感じがあって出て行きやすいのかなというふうに考えます。

(宮下知事)

なるほど、ありがとうございます。

ちょっとまた話題を戻して、次はそれぞれ自由な発言をまたお願いします。さっきの参考にさせていただきます。他いかがでしょうか。はい、和田さんどうぞ。

(和田さん)

今日の話を聞いて、働き方っていうところと、少子化対策っていうのはやっぱりセットかなっていうふうに思っています。始まる前に知事やいる方と少し雑談していたときに話したんですが、私は今、妊娠を希望していて、病院に通っているって話を前回しました。実際に人工授精をして、実際に一度妊娠したんですが、残念ながら最近ちょっと流産をしてしまって。そのとき、もちろんそれ自体もショックだったんですが、また仕事を休んで病院に行かなくちゃいけないっていうことが、すごく精神的なストレスで。

今日の話のなかでも、やっぱり長時間労働とかそういったところに取り組んでいけないといった話もありましたが、現場の負担を減らさないと結局休みにくくて。不妊治療休暇っていう仕組みがあっても、正直これもどういうふうに使えるのかってところが我々も知らないし、管理職も不妊治療ってデリケートな内容なせいか、ちょっと気を遣われているなっていうのも感じて。妊娠を希望している人っていうところでいくと、やっぱり仕事ってというのがすごく私的にはとても課題感があるなって最近思っているところです。

(宮下知事)

そうですね。ちょっと拍手お願いします。

この前それについてちょっと発言をしたんで、それを聞いてほしいんですが。A-Tube 出せますか。不妊治療費会見です。今、まさに和田さんからお話のあった内容を皆に呼びかけたから。

【以下、会見内容再生】

じゃあ、私から最後一言申し上げます。私は、やはり少子化、こどもの数がどんどん少なくなっていくって、日本自体が縮小し、あるいはなくなってしまうんじゃないかというような、大きな大きな懸念があるなかで、やはりこどもの数をいかに増やしていくかとかいうか、人口増に向けて取り組んでいくのかってことは青森県の課題であると同時に、日本の大きな課題であるというふうに思っています。こうして、不妊治療とって、ご夫婦で、あるいはカップルでこども

をどうしても授かりたいのに、金銭的な負担が大きくて授けられない環境っていうのは、非常に私は理不尽だなっていう思いがあります。

ですから今回、特に費用負担が大きい生殖補助医療について、助成に踏み切ったということです。これからはあらゆるハードルを、こどもを産むことに対するあらゆるハードルを下げていきたいというふうに思っていますが、一つそこは達成できるのかなというふうに思います。

ただ制度自体は、スタートすることがまず大事で、使い勝手ですとか、あるいはさらに拡充ということについては様子を見ながら、色んな御意見があると思うんですね。あえて申し上げますけど、43歳までっていう制限があったりですとか、あるいは居住地、もちろん青森県に限定するっていう制限があったりだとかっていうことはもちろんありますし。様々なあるいは書類での、紙での手続きになるとか、そういう様々なことはありますが、本当にやりながら良い制度に仕上げていきたいというふうに思います。ぜひこの制度の御理解と御協力、そして何よりもいち早くご夫婦には取組んでいただきたいというふうに思っております。

それに加えてもっと大事なことを申し上げたいんですが、この不妊治療っていうのは長い期間取り組むんですよ。一回行って終わりっていうわけじゃなくて、例えば治療開始から治療終了まで数ヶ月かかります。このために何回か、何回もと言った方が良いでしょう。医療機関に通わないといけないというふうになるんですね。

そのことについて、ぜひ青森県内の企業の皆さん、特にトップの皆さんですね。あるいは団体のトップの皆さん、事業者のトップの皆さんはこれについての休暇や、あるいは休暇といっても1日休むかどうかも含めて休暇等には、ぜひ御理解をいただきたいと思います。

これは女性だけではなくて、女性に付き添う男性職員、社員、従業員についても御配慮いただければと思っておりますし、そうした企業側の配慮が新しい命を青森県のなかで誕生させると。そしてそのことが将来的に青森県の経済を支えていくという仕組みになるということへの理解を深めることになりますので、最後に私から企業や団体やその事業者のトップの皆さんにそのことをお願いし、というかこの事業への理解と御協力をお願いして、今日の発表とさせていただきます。

本日もありがとうございました。

【動画終了】

(宮下知事)

ありがとうございました。拍手をいただいてる。

こういうことを続けていきます。あとは制度としてしっかりできるようにしたいというふうに思いますし、やっぱりそういうことだと思うんですよ。取り組むのは社会全体で取り組むんだっていう、今日のファザーリング・ジャパンの方の講演じゃないですけど、企業の風土と制度を変えていくっていうことはすごく大事なことだと思っていますので、しっかり取り組んでいきたいと思っていますし、また一般不妊治療の方もできれば拡充していきたいなというふうに思っています。ありがとうございました。

次、どうですか。はい、坂本さん。

(坂本さん)

すみません、時間がないということで1つだけ急いで言いたいと思います。どうしても知事に伝えなかったんですけども。

誰でも通園制度についてなんですけれども、新聞各社やメディアによると、全国で実施に向けた不安についてアンケートしたところ、保育士確保などの体制の整備が間に合わないとの回答が74%に上がったとのことで、保育士の数を確保して安心できる体制を整備するべきという意見があったそうです。

今年度4から5歳児の保育士廃止基準の見直し、保育士一人当たりの児童数を減らしたんですが、他の年齢にも波及してほしいと感じています。以上のことから、子育て支援や保育の質向上を目指すのであれば、やはり人員配置や賃金の改善、さらに必要ではないかと思っています。

また、誰でも通園制度のモデル事業を実施した自治体に課題をアンケートすると、職員不足との答えが9割、職場の負担増8割と、現場の戸惑いがあったそうです。こどもの自由利用は通常保育より難しさがありますが、そのために保育士以外の人も国は活用するとの方針であるようです。国の補助額は、こども1人につき1時間850円、保護者負担費を考えても園の利益は1時間1,150円ということで、保育士の平均時給より低いと新聞には書いてました。

現場の負担感を考えると、積極的に受け入れたいと思えない、活用したいと思える予算をとという声が上がったそうです。保護者からは時間にゆとりができて、保育園の先生たちに相談もできると好評で、保護者の心身の安定やゆとりを生むという点では制度として評価できると思いますが、問題点にも目を向けて、現場がおざなりになっているというような感覚もあるようなので、改善が必要だと思います。

また、その先ほど言った自由利用は通常保育より難しさがあるというのは、やはり保育施設の死亡事故などは0、1歳児が最も多くて、特に預け始めに多いので注意しなければいけないということもありますし、お子さんが慣れるまでは

大泣きしてそこに保育士が1人付きっきりでとられてしまうことになります。やっぱり手厚い保育というのは、人員の確保にあると思います。目が行き届くとその分より丁寧な保育をすることが可能です。人員が少ないと、保育士の余裕がなくなるということを私は思っているので、このような結果を踏まえ、県でもより良い誰でも通園制度を目指していただければと思います。以上です。

(宮下知事)

はい、ありがとうございます。

保育園は何回かというか、現場も含めて対話集会をさせていただいて、現場の苦労と現場の要望っていうのはよく私は理解しているつもりです。やっぱり保育園はこどもと園の信頼関係と、親と園の信頼関係と、そもそもこどもと親の信頼関係のうえに成り立っていると私は思っているので、なかなか誰でも通園制度が今のところまだ地域社会っていうか、園側から見て馴染みのある制度になっていないっていうのは、その通りだと思います。

ただこれから、シッターもそうですけど、保育士さんが社会でしっかり活躍できて、その分、母子分離ができる社会を作っていかなければ、やはりなかなか子育ての環境を改善できないと思っていますので、坂本さんからよく保育園の話、今までもずっと聞いていましたので、やっぱり保育園制度そのもの、保育制度そのものも今回青森モデルの中核的な位置付けのなかで、しっかりと取り組んでいくということを考えていますので。これまでの意見を含めて今日の意見も参考にさせていただきます。ありがとうございました。

(坂本さん)

すみません、もう1ついいですか。

(宮下知事)

いいですよ。

(坂本さん)

前回、保育士とか学童保育の人員不足をどうするかっていうこと、ちょっと議題になってどうしかなって感じだったんですけど。今、潜在保育士のことを考えていまして。保育士の資格はあるけれども、それを使わないで他の職業や主婦などで保育士として現在働いていない人のこと、潜在保育士っていうんですけども。かなりの数がいると思うんですよ。県や国もこの人たちに保育士として現場に戻って来れるような、斡旋やサポートを色々してくれているんですけ

れども、状況はあまり変わっていないので。保育の現場に戻りたいとか、もう一度やりたいと思ってもらえれば、有資格者の人員確保が可能になるんですよね。そうなって欲しいなと思うので、もう一つ踏み込んで、その潜在保育士が戻ってきてくれるような対策を、ちょっと考えていってほしいなとも思います。やはり保育士が嫌になって辞めている人が多いので、魅力的な仕事だと思ってもらって、再チャレンジしてもらおうという気持ち、やってみたいって気持ちを持ってもらうことが必要かなと思っていました。

(宮下知事)

ありがとうございました。皆、多分好き、こども好きで始めている仕事だと思うんです。気持ちになってもらえるよう、皆で頑張っていきましょう。ありがとうございました。拍手をお願いします。

そうしましたら、まだ、意見を述べていない方は。工藤さんいかがですか。

(工藤さん)

潜在保育士の話で思っていたんですけど、やっぱり青森県なのかもしれませんが、急にこどもが行ったことのない保育園にポッと行っても、なかなか保育士さんもお互い大変で。私はよくファミリーサポートっていうのを使っていたんですけども、ファミリーサポートの方にお支払いするお金ってすごく少ないんですよね。何時間も預かっても。そこにもし潜在保育士の方が加入してくれて、もう少しちゃんとしたお手当が出るのであれば、仕組みとして上手く働くんじゃないかなっていうふうに思いました。

(宮下知事)

はい、ありがとうございます。亀山さん。

(亀山さん)

はい。流れで潜在保育士のことについてなんですけれども、自分も保育士をやっております。うちは、多分潜在保育士が就職をしたパターンがとても多い事業者だと思います。どうしてうちに就職したのかというふうに聞いたところ、やはり福祉、保育園での勤務が朝7時だったり6時半だったり朝早い、子育てしながら早い。あとは帰りが遅いってところに注目をしまして、朝の8時から3時、4時までっていうふうにしたんですね。そうしたら、いわゆる潜在保育士の方々が就職をしてくださったので、例えばそういった時間の工夫ですとか。あとはその今もその誰でも通の話なんですけれども、そこに関しても様々なお子さんがいらっしゃると思うんですよね、御事情があったりだとか、障がいを持ってい

たりとか。その部分へのサポートとか、何もわからない子が来るので、そういったところも保育士たちは不安だったりとかするのかなっていう、単純な感想でした。

(宮下知事)

ありがとうございます。

(牧野さん)

私はまさにその現場で働いているので、坂本さんおっしゃる通りで全部言っていたのかなと思うんですが、今から始まる制度に関しては実感は湧いてませんが、たしかにそういう検討はたくさん重ねていて、通常業務のこどもを見る以外の業務が発生しているというのが事実です。

それから青森市内でいうと、保育の大学が2つあるのにも関わらず、学生数がすごく減っている。全体的なこどもの数が減っているとはいえ、それに相当する減少ではないのではないかなと。最近やっぱり事故とかそういうところで、そういう職種を希望するこどもが減っているところから、さらに若い世代の保育士になりたいっていう子がいない。欲しいのに来ない。実際就職をしてみるときつとどこの園も仕事の持ち帰りがある、残業がある。残業はしないようにと上からは言われるものの、仕事は終わらせることができない。今日のお話がまさにその通りで、風土を変える＝業務改善をどんどんしていかなければ追いついていけない、こども受け入れられないという現状を、どうにか本当に県でどれくらい潜在保育士さんがいらっしゃるのか、ちょっと数値は把握してないですけども、どんどんサポートしてくれる方が増えればいいのかと思う反面、人が増えれば増えるほどそのこどもの状況を共有、共通認識できることが難しくもなっていくので、難しいなと思います。以上です。

(宮下知事)

ありがとうございます。

制度をつくっても、つくって終わりじゃなくて、ちゃんとできるまでには色々な工夫があったりとか、皆で努力しないと上手くいかない。それはその現場の努力だけじゃなくて、制度をつくった側もそれから制度をサポートする私たち側もそうだと思うので、そこはしっかりやっていきたいなと思っています。

ということで、約束のお時間になりましたが、今日も皆さんから積極的に意見いただいてありがとうございました。そろそろ本当に政策をまとめていくタイミングになります。言い足りないこと、たくさんあるかもしれませんが、紙でも文書でもいつでも出していただいて、あるいはお友達からも、毎回行動ち

やんとしてもらえるので、何を言ってきたんだとか、こういうこと言ってほしいっていうのも積み重なっていると思いますから、引き続きお願いしたい。本当に10月には良い形で、皆で発表できれば良いなと思っていますので、よろしくお願いいたします。

今日も熱い議論ありがとうございました。

(一同)

ありがとうございました。

(司会)

今回の会議は7月20日、土曜日の開催を予定しております。メンバーの皆様には引き続き御協力を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、令和6年度第1回青森県子ども未来県民会議を閉会いたします。

本日はお忙しいなか、お集まりいただき誠にありがとうございました。

(宮下知事)

はい、ありがとうございました。

(一同)

ありがとうございました。